

- 年頭所感 -
社会福祉学はこの時代の希望を見いだす | 年に

一般社団法人日本社会福祉学会 会長 空閑 浩人(同志社大学)

大変な年明けとなりました。

1月1日に発生した能登半島地震によって、甚大な被害がもたらされています。被災地の人々が、2024年が良い年になることを願いつつ、それぞれの場所で新年のはじまりを迎えていたと思うと、とても心が痛みます。徐々に明らかになる被害の状況に触れるにつれて、自然の驚異にあらためて圧倒されるとともに、それでも、どうして元日にこのようなことが、と思わずにはられません。

犠牲となられた方々に深く哀悼の意を表します。また、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。そして、被災者の救済と被災地の復旧にご尽力されている方々に深く敬意を表します。被災地域の皆様の一日一日をしのぐ毎日に思いを馳せ、一日も早く安全と安心が確保されることを心よりお祈り申し上げつつ、自分ができること、なすべきことを実行していきたいと思えます。

そして、昨年につき、今年も年明けから戦争のニュースが続いています。解決の糸口が見えないまま、パレスチナ自治区ガザ地区では戦闘開始から4ヶ月がたち、ウクライナの戦争も3年目に入ろうとしています。多くの子どもや市民の犠牲が未だ後を絶ちません。国籍や宗教、文化や言語の違いを超えて互いに尊重しあう社会の実現、争いを決して軍事力ではなく、ひたすら話し合いを重ねることで解決するという道の遠さを感じています。自ら平和を壊す人間の愚かさを痛切に感じつつ、そして自らも同じ人間であることを覚えつつ、しかしそれでも人間性への信頼と解決の可能性をあきらめず、人間の英知を結集して、なんとかこの状況が一刻も早く終わって欲しいと祈る毎日です。

私たちの生活は、2020年の新型コロナウイルス感染症の拡大以降、様々な制限のなかにはありました。そして、昨年になってようやくコロナ前の日常を取り戻したように見えます。しかしながら、明るい話題ばかりではありません。コロナ禍の日本で顕在化した孤独・孤立の問題や生活困窮の問題は、一層深刻化する状況にあります。11年ぶりに増加したと報じられた2020年の自殺者数の内訳では、特に女性と子どもの数が顕著に増大したことが示されています。この傾向が続くなかで、2022年には小中高生の自殺者数が500人を超えて、統計史上最多を更新したとされています。孤独や孤立の問題は、今や生命にかかわる問題です。社会の一員として、すなわち地域の、職場の、学校の一員として、あるいは家族の一員として、人や場所とのつながりのなかで生きるという、その基盤となるものが脅かされ、多くの人々が深い孤独や孤立を強いられる状況があります。

人が生きるとは何か、いのちとは何か、生活や暮らしとは何か、それが支えられるとはどういうことかが問われていると思います。私たちが研究、教育、そして実践する社会福祉学とは、人と社会の新たな価値観を創造するとともに、そのような価値観に基づいて連帯し、行動する学問でなければならないと思います。人々の交流や対話を大切にして、人や社会のゆとりや寛容さの維持や回復に貢献する学問でなければならないと思います。それは、人々の福祉を保障する制度や施策のあり方を議論する学

問であるとともに、身近にいる一人の苦しみや生きづらさに気づき、その声に真摯に耳を傾けて、かかり続ける実践の学問でなければならないと思います。そのために、人々の間に壁をつくり、隔てる言葉ではなく、多様な人々をつなげて包摂する言葉を、数多く生み出して発信できる学問でなければならないと思います。このことは、社会福祉学の研究や教育、実践に携わる私たち学会員の責任であり、かつ使命でもあると思います。

1954年5月の日本社会福祉学会の設立から、今年で70周年を迎えます。昨年開催された第71回秋季大会のテーマは、「世界の幸せをカタチにする社会福祉学の挑戦」でした。私たちの生活は、各地での災害の発生や生命の危機にもかかわるような気候変動、またICTやAIの発達など、社会状況のめまぐるしい動きのなかにあります。複雑で不安定な時代である今こそ、社会福祉学に、この学会に、そしてそこに携わる私たち一人ひとりにおいて、様々な「挑戦」が求められていると思います。70周年という節目の年にあたり、先人たちによって築かれた歴史とその知にあらためて学びつつ、「何のための社会福祉学であり、何のための社会福祉学会なのか」という本学会の存在意義を問い直し、今後の展望を描くさまざまな議論と新たな挑戦の機会となる1年になることを願います。

人間とその生には尊厳があります。その尊厳が冒される様々な状況に対して、社会福祉学は徹底して抗わねばならないと思います。そのためにも、今一度学問としての社会福祉学の原理に立ち返り、社会福祉学への姿勢を新たにしたいと思います。そして本学会が、この時代に求められる社会福祉の「知」の生成の現場となり、既存の知を問い直し、社会福祉学の発展と新たな実践の創造につながる場となることを願います。そして、社会福祉学が人と社会の幸せに貢献する「生きた知」の体系として、学会員をはじめとする多くの方に共有され、磨かれ、継承される場となることを願います。

そして、社会福祉学という学問があること、その学問に携わる私たち学会員がいること、その研究や教育、実践に日々携わる人々がいることは、様々な社会問題や生活問題を抱える今日の状況において、大切な希望であると思います。人々の尊厳ある生を決して諦めない社会福祉学に、この時代の希望を、一つでも多く、皆様とともに見出していきたいと思います。

学会員の皆様の、この1年のご健勝を心からお祈り申し上げます。

2024年も、本学会の各事業へのご支援とご協力のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。